

目次

1.ビジネス書「数字」書評

2.人生で感銘を受けた本

[編集後記]

1.ビジネス書「数字」書評 松村勝弘

○『社長！儲けたいなら数字はココを見なくっちゃ！』

小山昇著 すばる舎 2007年11月

<http://www.creage.ne.jp/app/BookDetail?isbn=4883996190>

著者の小山氏は少し前から私が注目している人物の一人である。この人の本はできるだけ読むようにしている。前回(第77号)もこの人の本を紹介したが、今回も氏の本をとりあげたい。氏は最近次々とベストセラーを書かれていように見受ける。ダスキンのエリア・フランチャイズやコンサルをも業とする株式会社武蔵野の社長でもある氏は、カリスマ経営者とも評されている。

この著者に注目するようになったきっかけは、数年前に、某コンサルタントの先生とお話しをさせていただいたとき「こんな本がある、読んでみなさい」と薦められたことである。そのとき薦められた本が『会社開眼の法則』(小山昇著 TBSブリタニカ 1996年)であった。そのときはすでに絶版で、これをアマゾンの古本で買ったのを覚えている。以後小山昇氏の著書を買うことがよくある。今回紹介するのも氏の最新作で、かつ面白かった。『会社開眼の法則』の帯に「門外不出の『ビジネス語録』ついに刊行」とあったが、氏の寸言はいつもすばらしい。

今回の書評を書くにあたって『会社開眼の法則』を再びひもとき、ついついその一部を紹介したくなった。曰く。

プロ(アマ)の考え方。

(1) 明確な目標(バクゼン)(2) 自分の

シナリオを書く(他人が気になる)(3) 信じこめる(不信が先にある)(4) できる方法を考える(言い訳が先に出る)(5) 使命感で最後まで(途中で投げ出す)(6) 成功すべく努力(失敗を恐れる)(7) 可能性に挑戦(経験に生きる)(8) 成長を求め続ける(現状にあまえる)(9) 時間を有効利用(行き当たりばったり)(10) 常に自己訓練(気まぐれ)(11) 自己投資をしつづける(享乐的資金優先)(12) 人に役立つ喜び(自己防衛的)

これなど今読み返してみてもゾクゾクする。で、今回紹介する『社長！儲けたいなら数字はココを見なくっちゃ！』だが、最近私が受け持っている、再チャレンジを目指す高齢者向けの市民講座「財務諸表分析」の参考にと買い求めたものである。どうしてもわれわれ大学教員は理論先行で難しく話しがちである。私は易しく話そうと心がけてはいるのだが、それでも難しく話してしまうことが少なくない。

じつは、最近の拙著(『企業価値向上のためのファイナンス入門 - M & A時代の財務戦略』中央経済社 2007年)でもそんなことを経験した。気持ちとしては、できるだけ易しくファイナンスを論じたい、M&A が盛んになってきている今こそファイナンスを易しく読み解く本があつてよいのではないかという思いをこの本に込め、MBAへの入門書という位置づけを与えた。ビジネスマンにこそ読んで貰いたいという思いを込めたつもりである。実際の企業名、財務数値をたっぴり入れ込んで書いた。例えば、「第7章企業価値評価とM & A」では、話題になったライブドアから最近のスタイルパートナーズによるTOB提案、そしてLBO、MBOに至るまで企業価値評価の観点から論じた。この本など実際に手に取って見ていただかないと、そのおもしろさをわかって貰えないと思う。

しかし、それでも今回小山氏のこの本を読んでわれわれがどうしても難しく話しがちであることを再認識した(もちろん私の場合、易しさと正確さの両方を追い求めて

いるという面はあるのだが・・・)。例えば、「限界利益 = 売上高 - 変動費」という会計学などでは常識的な公式に関してである。それは正しいのだけれど、それが実務で簡便に使えるものかということである。

小山氏のこの本で「小難しい、教科書的な会計の知識はいらない！」と言われているが、まさにそれを実践されていることがわかる。ここでは詳細を紹介する余裕はなく、実際にお読みいただくより他ないのだが、一例を挙げるなら、われわれがつい「売上高 - 売上原価 = 売上総利益」などと言ってしまいがちなところを、「売上高 - 仕入 = 粗利益」という簡便な表現をされる。確かにそう伝えられた方がわかって貰いやすい。

また、先の『会社開眼の法則』同様、一言での確に表現するのが相変わらずうまい。曰く「過去と他人は変えられない。変えられるのは未来と自分です」とか「経営は過去計算ではなく、未来計算で考えるべきです。経常利益はいくら、そのためには経費はいくら使い、いくらの売上を上げるというように、最初に結果を決め、その実現手段を逆算して決めていくのが本当の経営計画です」などと極めてわかりやすい。

2. 人生で感銘を受けた本 松村勝弘

○ 『二十世紀から何を学ぶか(上)(下)』
寺島実郎著 新潮社 2007年5月

<http://www.creage.ne.jp/app/BookDetail?isbn=4106035812>

<http://www.creage.ne.jp/app/BookDetail?isbn=4106035820>

前回書評で「人生で感銘を受けた本」として新渡戸稲造『武士道』を上げたが、今回はそういう本ともいえるし、また、ある種のビジネス本ともいうことができる本として、この『二十世紀から何を学ぶか』を簡潔に紹介したい。上巻は「1900年への旅 欧州と出会った若き日本」、下巻は

「1900年への旅 アメリカの世紀、アジアの自尊」というサブタイトルが付いている。この寺島実郎氏についても、かなり以前某先生から紹介され、この人の本が出されたら読むようにしている。

20世紀初頭の日本人が欧米から一体何を学んだのか、そして現代の日本人にそれほどの真摯な姿勢、自信はあるのかを、一貫して問いつめている。軽佻浮薄な今日の風潮を批判する基準として20世紀初頭の日本人 - それに夏目漱石であったり、新渡戸稲造、岡倉天心、南方熊楠であったりするわけだが - の生き方に求めている。

その底流には「大衆の支配は『人類の退廃』であった」という今日の大衆民主主義社会批判の目がある。実は、『共和主義ルネサンス』(佐伯啓思・松原隆一郎編著 NTT出版 2007年)でも同旨の主張がなされていると思う。最近のグローバリズム、市場主義跋扈に警告を発する点で両著は共通している。これらの著書こそ「骨太」というべきだろう。

松村勝弘(まつむら かつひろ)略歴

1945年京都府生まれ。立命館大学大学院卒業、立命館大学教授。著作：『企業価値向上のためのファイナンス入門 - M & A時代の財務戦略』中央経済社 2007年、『経済・経営系学部の情報リテラシー』(共著) 学術図書出版社 2007年、『現代企業の財務戦略(第4版)』サイテック 2004年、『エクセルでわかる企業分析・決算書』(共著) 東京書籍 2003年、『日本の経営財務とコーポレート・ガバナンス(第2版)』中央経済社 2001年、ほか。

[編集後記]

松村勝弘氏には第77号に続いて2度目のご執筆を快諾いただいた。小山昇氏にはITコーディネータ協会時代にお世話になっており、世の中狭いものである。「過去と他人は変えられない。変えられるのは未来と自分です。」は、けだし名言である。

株式会社クリエイイジ 代表取締役社長 西脇隆
<http://www.creage.ne.jp> 電話 03-3593-7122 ファクス 03-3593-7123